三つの宝

芥川龍之介

一

森の中。三人の盗人(ぬすびと)が宝を争っている。宝とは一飛びに千里飛ぶ長靴(ながぐつ)、着れば姿の隠れるマントル、鉄でもまっ二(ぷた)つに切れる剣(けん)――ただしいずれも見たところは、古道具らしい物ばかりである。

第一の盗人　そのマントルをこっちへよこせ。

第二の盗人　余計(よけい)な事を云うな。その剣こそこっちへよこせ。――おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人　この長靴はおれの物じゃないか？　貴様

こそおれの物を盗んだのだ。

第一の盗人　よしよし、ではこのマントルはおれが貰って置こう。

第二の盗人　こん畜生！　貴様なぞに渡してたまるものか。

第一の盗人　よくもおれを撲ったな。――おや、またおれの剣も盗んだな？

第三の盗人　何だ、このマントル泥坊め！

三人の者が大喧嘩になる。そこへ馬に跨った王子が一人、森の中の路を通りかかる。

王子　おいおい、お前たちは何をしているのだ？（馬

から下りる）

第一の盗人　何、こいつが悪いのです。わたしの剣を盗んだ上、マントルさえよこせと云うものですから、――

第三の盗人　いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人　いえ、こいつ等（ら）は二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、――

第一の盗人　嘘をつけ！

第二の盗人　この大法螺（おおぼら）吹きめ！

三人また喧嘩をしようとする。

王子　待て待て。たかが古いマントルや、穴のあいた長靴ぐらい、誰がとっても好いじゃないか？

第二の盗人　いえ、そうは行きません。このマントルは着たと思うと、姿の隠れるマントルなのです。

第一の盗人　どんなまた鉄の兜でも、この剣で切れば切れるのです。

第三の盗人　この長靴もはきさえすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子　なるほど、そう云う宝なら、喧嘩をするのももっともな話だ。が、それならば欲張らずに、一つずつ分ければ好いじゃないか？

第二の盗人　そんな事をしてごらんなさい。わたしの首はいつ何時(なんどき)、あの剣に切られるかわかりはしません。

第一の盗人　いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られれば、何を盗まれるか知れますまい。

第二の盗人　いえ、何を盗んだ所が、あの長靴をはかなければ、思うようには逃げられない訣(わけ)です。

王子　それもなるほど一理窟(ひとりくつ)だな。では物は相談だが、わたしにみんな売ってくれないか？　そうすれば心配も入らないはずだから。

第一の盗人　どうだい、この殿様に売ってしまうの

は？

第三の盗人　なるほど、それも好(い)いかも知れない。

第二の盗人　ただ値段次第だな。

王子　値段は――そうだ。そのマントルの代りには、この赤いマントルをやろう、これには刺繍(ぬいとり)の縁(ふち)もついている。それからその長靴の代りには、この宝石のはいった靴をやろう。この黄金細工(きんざいく)の剣(けん)をやれば、その剣をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盗人　わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きましょう。

第一の盗人と第三の盗人　わたしたちも申し分はありません。

王子　そうか。では取り換えて貰おう。

王子はマントル、剣、長靴等を取り換えた後、また馬の上に跨りながら、森の中の路を行きかける。

王子　この先に宿屋はないか？

第一の盗人　森の外へ出さえすれば「黄金の角笛」という宿屋があります。では御大事にいらっしゃい。

王子　そうか。ではさようなら。（去る）

第三の盗人　うまい商売をしたな。おれはあの長靴が、こんな靴になろうとは思わなかった。見ろ。止め金

には金剛石（ダイヤモンド）がついている。

第二の盗人　おれのマントルも立派（りっぱ）な物じゃないか？これをこう着た所は、殿様のように見えるだろう。

第一の盗人　この剣も大した物だぜ。何しろ柄（つか）も鞘（さや）も黄金（きん）だからな。――しかしああやすやす欺（だま）されるとは、あの王子も大莫迦（おおばか）じゃないか？

第二の盗人　しっ！　壁に耳あり、徳利（とくり）にも口だ。まあ、どこかへ行って一杯やろう。

三人の盗人は嘲笑（あざわら）いながら、王子とは反対の路へ行ってしまう。

二

「黄金の角笛」と云う宿屋の酒場。酒場の隅には王子がパンを嚙じっている。王子のほかにも客が七八人、――これは皆村の農夫らしい。

宿屋の主人　いよいよ王女の御婚礼があるそうだね。

第一の農夫　そう云う話だ。なんでも御婿になる人は、
　黒ん坊の王様だと云うじゃないか？

第二の農夫　しかし王女はあの王様が大嫌いだと云う

噂（うわさ）だぜ。

第一の農夫　嫌いなればお止しなされば好（い）いのに。

主人　ところがその黒ん坊の王様は、三つの宝ものを持っている。第一が千里飛べる長靴（ながぐつ）、第二が鉄さえ切れる剣（けん）、第三が姿の隠れるマントル、——それを皆献上（けんじょう）すると云うものだから、欲の深いこの国の王様は、王女をやるとおっしゃったのだそうだ。

第二の農夫　御可哀（おかわい）そうなのは王女御一人だな。

第一の農夫　誰か王女をお助け申すものはないだろうか？

主人　いや、いろいろの国の王子の中には、そう云う

人もあるそうだが、何分あの黒ん坊の王様にはかなわないから、みんな指を啣(くわ)えているのだとさ。

第二の農夫　おまけに欲の深い王様は、王女を人に盗まれないように、竜(りゅう)の番人を置いてあるそうだ。

主人　何、竜じゃない、兵隊だそうだ。

第一の農夫　わたしが魔法(まほう)でも知っていれば、まっ先に御助け申すのだが、――

主人　当り前さ、わたしも魔法を知っていれば、お前さんなどに任(まか)せて置きはしない。（一同笑い出す）

王子（突然一同の中へ飛び出しながら）よし心配するな！　きっとわたしが助けて見せる。

一同　（驚いたように）あなたが?!

王子　そうだ、黒ん坊の王などは何人でも来い。（腕組をしたまま、一同を見まわす）わたしは片っ端(ぱし)から退治(たいじ)して見せる。

主人　ですがあの王様には、三つの宝があるそうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、――

王子　鉄でも切れる剣か？　そんな物はわたしも持っている。この長靴を見ろ。この剣を見ろ。この古いマントルを見ろ。黒ん坊の王が持っているのと、寸分(すんぶん)も違わない宝ばかりだ。

一同　（再び驚いたように）その靴が?!　その剣が?!

そのマントルが?!

主人　（疑わしそうに）しかしその長靴には、穴があいているじゃありませんか？

王子　それは穴があいている。が、穴はあいていても、一飛びに千里飛ばれるのだ。

主人　ほんとうですか？

王子　（憐むように）お前には嘘だと思われるかも知れない。よし、それならば飛んで見せる。入口の戸をあけて置いてくれ。好いか。飛び上ったと思うと見えなくなるぞ。

主人　その前に御勘定を頂きましょうか？

王子　何、すぐに帰って来る。土産（みやげ）には何を持って来てやろう。イタリアの柘榴（ざくろ）か、イスパニアの真桑瓜（まくわうり）か、それともずっと遠いアラビアの無花果（いちじく）か？

主人　御土産（おみやげ）ならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子　では飛ぶぞ。一、二、三！

王子は勢好（いきおいよ）く飛び上る。が、戸口へも届（とど）かない内に、どたりと尻餅（しりもち）をついてしまう。

一同どっと笑い立てる。

主人　こんな事だろうと思ったよ。

第一の農夫　千里どころか、二三間も飛ばなかったぜ。

第二の農夫　何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、また千里飛び返ったから、もとの所へ来てしまったのだろう。

第一の農夫　冗談じゃない。そんな莫迦な事があるものか。

一同大笑いになる。王子はすごすご起き上りながら、酒場の外へ行こうとする。

主人　もしもし御勘定を置いて行って下さい。

王子無言のまま、金を投げる。

第二の農夫　御土産は？

王子　（剣の柄へ手をかける）何だと？

第二の農夫　（尻ごみしながら）いえ、何とも云いはしません。（独り語(ごと)のように）剣だけは首くらい斬(き)れるかも知れない。

主人　（なだめるように）まあ、あなたなどは御年若(おとしわか)なのですから、一先(ひとまず)御父様(おとうさま)の御国へお帰りなさい。いくらあなたが騒(さわ)いで見たところが、とても黒ん坊の王様にはかないはしません。とかく人間と云う者は、何でも身のほどを忘れないように慎(つつし)み深くするのが上分別(じょうふんべつ)です。

一同　そうなさい。そうなさい。悪い事は云いはしません。

王子　わたしは何でも、――何でも出来ると思ったのに、（突然涙を落す）お前たちにも恥ずかしい（顔を隠しながら）ああ、このまま消えてもしまいたいようだ。

第一の農夫　そのマントルを着て御覧なさい。そうすれば消えるかも知れません。

王子　畜生！（じだんだを踏む）よし、いくらでも莫迦にしろ。わたしはきっと黒ん坊の王から可哀そうな王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかったが、まだ剣もある。マントルも、――（一生懸命に）いや、空手でも助けて見せる。その時に後悔し

ないようにしろ。（気違いのように酒場を飛び出してしまう。）

主人　困ったものだ、黒ん坊の王様に殺されなければ好(い)いが、——

三

王城の庭。薔薇(ばら)の花の中に噴水(ふんすい)が上(あが)っている。始(はじめ)は誰もいない。しばらくの後(のち)、マントルを着た王子

が出て来る。

王子　やはりこのマントルは着たと思うと、たちまち姿が隠れると見える。わたしは城の門をはいってから、兵卒にも遇えば腰元にも遇った。が、誰も咎めたものはない。このマントルさえ着ていれば、この薔薇を吹いている風のように、王女の部屋へもはいれるだろう。――おや、あそこへ歩いて来たのは、噂に聞いた王女じゃないか？　どこかへ一時身を隠してから、――何、そんな必要はない、わたしはここに立っていても、王女の眼には見えないはずだ。

王女は噴水の縁へ来ると、悲しそうにため息をする。

王女　わたしは何と云う不仕合せなのだろう。もう一週間もたたない内に、あの憎（にく）らしい黒ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行ってしまう。獅子（しし）や鰐（わに）のいるアフリカへ、（そこの芝（しば）の上に坐りながら）わたしはいつまでもこの城にいたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いていたい。……

王子　何と云う美しい王女だろう。わたしはたとい命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女　（驚いたように王子を見ながら）誰です、あなたは？

王子　（独り語（ごと）のように）しまった！　声を出したの

は悪かったのだ！

王女　声を出したのが悪い？　気違いかしら？　あんな可愛い顔をしているけれども、――

王子　顔？　あなたにはわたしの顔が見えるのですか？

王女　見えますわ。まあ、何を不思議そうに考えていらっしゃるの？

王子　このマントルも見えますか？

王女　ええ、ずいぶん古いマントルじゃありませんか？

王子　（落胆したように）わたしの姿は見えないはず

なのですがね。

王女　（驚いたように）どうして？

王子　これは一度着さえすれば、姿が隠れるマントルなのです。

王女　それはあの黒ん坊の王のマントルでしょう。

王子　いえ、これもそうなのです。

王女　だって姿が隠れないじゃありませんか？

王子　兵卒(へいそつ)や腰元(こしもと)に遇(あ)った時は、確かに姿が隠れたのですがね。その証拠(しょうこ)には誰に遇っても、咎(とが)められた事がなかったのですから。

王女　（笑い出す）それはそのはずですわ。そんな古

いマントルを着ていらっしゃれば下男(げなん)か何かと思われますもの。

王子　下男！（落胆したように坐ってしまう）やはりこの長靴と同じ事だ。

王女　その長靴もどうかしましたの？

王子　これも千里飛ぶ長靴なのです。

王女　黒ん坊の王の長靴のように？

王子　ええ、――ところがこの間(あいだ)飛んで見たら、たった二三間も飛べないのです。御覧なさい。まだ剣(けん)もあります。これは鉄でも切れるはずなのですが、――

――

王女　何か切って御覧になって？

王子　いえ、黒ん坊の王の首を斬るまでは、何も斬らないつもりなのです。

王女　あら、あなたは黒ん坊の王と、腕競べをなさりにいらしったの？

王子　いえ、腕競べなどに来たのじゃありません。あなたを助けに来たのです。

王女　ほんとうに？

王子　ほんとうです。

王女　まあ、嬉しい！

突然黒ん坊の王が現れる。王子と王女とはびっくり

する。

黒ん坊の王　今日（こんにち）は。わたしは今アフリカから、一飛びに飛んで来たのです。どうです、わたしの長靴の力は？

王女　（冷淡に）ではもう一度アフリカへ行っていらっしゃい。

王　いや、今日（きょう）はあなたと一しょに、ゆっくり御話がしたいのです。（王子を見る）誰ですか、その下男は？

王子　下男？（腹立たしそうに立ち上る）わたしは王子です。王女を助けに来た王子です。わたしがここ

　にいる限りは、指一本も王女にはささせません。

王　（わざと叮嚀に）わたしは三つの宝を持っていま
す。あなたはそれを知っていますか？

王子　剣と長靴とマントルですか？　なるほどわたし
の長靴は一町も飛ぶ事は出来ません。しかし王女と
一しょならば、この長靴をはいていても、千里や二
千里は驚きません。またこのマントルを御覧なさい。
わたしが下男と思われたため、王女の前へも来られ
たのは、やはりマントルのおかげです。これでも王
子の姿だけは、隠す事が出来たじゃありませんか？

王　（嘲笑う）生意気な！　わたしのマントルの力を

見るが好い。（マントルを着る。同時に消え失せる）

王女　（手を打ちながら）ああ、もう消えてしまいました。わたしはあの人が消えてしまうと、ほんとうに嬉しくてたまりませんわ。

王子　ああ云うマントルも便利ですね。ちょうどわたしたちのために出来ているようです。

王　（突然また現われる。忌々しそうに）そうです。あなた方のために出来ているようなものです。わたしには役にも何にもたたない。（マントルを投げ捨てる）しかしわたしは剣を持っている。（急に王子を睨みながら）あなたはわたしの幸福を奪うものだ。

さあ尋常に勝負をしよう。わたしの剣は鉄でも切れる。あなたの首位は何でもない。（剣を抜く）

王女　（立ち上るが早いか、王子をかばう）鉄でも切れる剣ならば、わたしの胸も突けるでしょう。さあ、一突きに突いて御覧なさい。

王　（尻ごみをしながら）いや、あなたは斬（き）れません。

王女　（嘲（あざけ）るように）まあ、この胸も突けないのですか？　鉄でも斬れるとおっしゃった癖に！

王子　お待ちなさい。（王女を押し止（とど）めながら）王の云う事はもっともです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなければなりません。（王に）さあ、

すぐに勝負をしよう。（剣を抜く）

王　年の若いのに感心な男だ。好いか？　わたしの剣にさわれば命はないぞ。

王と王子と剣を打ち合せる。するとたちまち王の剣は、杖か何か切るように、王子の剣を切ってしまう。

王　どうだ？

王子　剣は切られたのに違いない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑っている。

王　ではまだ勝負を続ける気か？

王子　あたり前だ。さあ、来い。

王　もう勝負などはしないでも好い。（急に剣を投げ

捨てる）勝ったのはあなただ。わたしの剣などは何にもならない。

王子　（不思議そうに王を見る）なぜ？

王　なぜ？　わたしはあなたを殺した所が、王女にはいよいよ憎（にく）まれるだけだ。あなたにはそれがわからないのか？

王子　いや、わたしにはわかっている。ただあなたにはそんな事も、わかっていなそうな気がしたから。

王　（考えに沈みながら）わたしには三つの宝があれば、王女も貰えると思っていた。が、それは間違いだったらしい。

王子　（王の肩に手をかけながら）わたしも三つの宝があれば、王女を助けられると思っていた。が、それも間違いだったらしい。

王　そうだ。我々は二人とも間違っていたのだ。（王子の手を取る）さぁ、綺麗に仲直りをしましょう。

わたしの失礼は赦して下さい。

王子　わたしの失礼も赦して下さい。今になって見ればわたしが勝ったか、あなたが勝ったかわからないようです。

王　いや、あなたはわたしに勝った。わたしはわたし自身に勝ったのです。（王女に）わたしはアフリカ

へ帰ります。どうか御安心なすって下さい。王子の剣は鉄を切る代りに、鉄よりももっと堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御婚礼のために、この剣と長靴と、それからあのマントルと、三つの宝をさし上げましょう。もうこの三つの宝があれば、あなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思いますが、もしまた何か悪いやつがあったら、わたしの国へ知らせて下さい。わたしはいつでもアフリカから、百万の黒ん坊の騎兵と一しょに、あなた方の敵を征伐に行きます。（悲しそうに）わたしはあなたを迎えるために、アフリカの都のまん中に、

大理石の御殿を建てて置きました。その御殿のまわりには、一面の蓮の花が咲いているのです。（王子に）どうかあなたはこの長靴をはいたら、時々遊びに来て下さい。

王子　きっと御馳走になりに行きます。

王女　（黒ん坊の王の胸に、薔薇の花をさしてやりながら）わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優しい方だとは、夢にも知らずにいたのです。どうかかんにんして下さい。ほんとうにわたしはすまない事をしました。（王の胸にすがりながら、子供のように泣き始める）

王　（王女の髪（かみ）を撫（な）でながら）有難（ありがと）う。よくそう云ってくれました。わたしも悪魔（あくま）ではありません。悪魔も同様な黒ん坊の王は御伽噺（おとぎばなし）にあるだけです。（王子に）そうじゃありませんか？

王子　そうです。（見物に向いながら）皆さん！　我々三人は目がさめました。悪魔のような黒ん坊の王や、三つの宝を持っている王子は、御伽噺にあるだけなのです。我々はもう目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでいる訣（わけ）には行きません。我々の前には霧（きり）の奥から、もっと広い世界が浮んで来ます。我々はこの薔薇と噴水との世界から、一しょにその

世界へ出て行きましょう。もっと広い世界！　もっと醜い、もっと美しい、――もっと大きい御伽噺の世界！　その世界に我々を待っているものは、苦しみかまたは楽しみか、我々は何も知りません。ただ我々はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のように、進んで行く事を知っているだけです。

（大正十一年十二月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
1987（昭和62）年2月24日第1刷発行
1995（平成7）年4月10日第6刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～11月刊行
入力：j.utiyama
校正：多羅尾伴内
2004年1月5日作成
2010年11月4日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。